

聴く物語としての「夏帆」

文人の武蔵野



村上春樹 ⑩

村上春樹の短編小説「夏帆」が「新潮」の2024

年6月号に発表される前の3月、同作は、村上春樹自身によって早稲田大学大隈記念講堂に集まった1100人の聴衆の前で朗読されました。

「村上春樹×川上未映子 春のみみずく朗読会」と

「村上春樹×川上未映子 春のみみずく朗読会」で「夏帆」を朗読した村上春樹（撮影・高田梓、早稲田大隈記念講堂で）

「夏帆」は、朗読会のために執筆されたものだと言われ、朗読された。人前で声に出して読むことを前提に書き下ろされた作品は、朗読に向けた内容と文体をもち、分量も語り手と聴き手にとって適切な長さで意識されたはずだ。

聴衆にとっては、読者として活字を黙読する場合とは異なり、目の前の語り手の声を耳で聴くというライブ体験を通して物語を受容したことになります。「夏帆」というテキストは、村

上春樹が聴衆に語りかけることによって生成し、その後、雑誌に発表されて小説になりました。

夏帆が初対面の佐原に「君みたいな醜い相手は初めてだ」と言われる冒頭の場面も、佐原の容姿が「ハンサム」で感じもよいと示されるくだりも、佐原の内面について「アリクイ」がその細長い舌の先で蟻の巣を舐め尽くすみたいに「夏帆の心の動きを残らず読み取っている」と形容する描写も、75歳（当時）の村上春樹を通して語られたのです。

そうした舞台演出のもとで夏帆が負った心の傷は、村上春樹の傷であり、聴き手の傷になり、傷をめぐり謎がその場で共有されているのです。

続編の「武蔵境のありくい」では、前作「夏帆」では比喩だった「アリクイ」が、実在の「ありくい」となって登場します。

佐原を形容する「アリクイ」が表象するのは、佐原の美しい外見が夏帆に示した醜悪な内面でした。続編に登場する「ありくい」の容姿は蟻食いのそれでしょう。夏帆を佐原の魔の手から避難させるために武蔵野に連れ出した救世主のような「ありくい」には、佐原

の中の「アリクイ」は棲んでいないのでしょうか。

善悪の基準がどこにあるのか、美醜は善悪の判断にどう関わるのかということがますますわからなくなります。（敬称略）

（武蔵野大教授、むさし野文学館館長・土屋忍）

*

過去の連載は、読売新聞オンラインで読みいただけます。スマートフォンはQRコードから。

